

垣根を越えよう

第24回 日本エイズ学会学術集会・総会ニューズレター

第6号

発行：2010年11月26日(金曜)

編集：第24回日本エイズ学会学術集会・総会ニューズレター編集班



最終セッションへ向け ラパトア^{はし}奔る！

エイズ学会第2日



3日間にわたる第24回日本エイズ学会学術集会・総会の議論は最終日の26日夕、第1会場のラパトアセッションで締めくくられる。基礎、臨床、社会3分野の一般演題は3日間で358件、このうちポスターセッションを除く168件の総集編を各分野のラパトア(報告者)が1人15分ずつの報告にまとめる。日本エイズ学会では初めての試みだけに「どんなセッションになるの」と戸惑いを交えつつ、期待も高まっている。キーパーソンである3人の報告者に話を聞いた。

未体験ゾーンであるラパトアを引き受けるのは、基礎分野が大阪大学微生物病研究所の塩田達雄教授、臨床分野が兵庫医科大学血液内科の日笠聡医師、社会分野は慶応義塾大学文学部の樽井正義教授の3人だ。

膨大な発表の中から、何を選択するのか。他分野に比べると、基礎分野はやや演題数が少ないため、塩田教授は基礎関係の一般演題セッションすべてに出席している。「かなり大変です」と言いつつ、「全部、聞かせてもらって決めようと思う」と話す。ポイントは「基礎から臨床、社会に何が発信できるか」という視点だ。

ウイルスの増殖の仕組み、薬の効果、およびそれを評価する動物実験系などが中心になりそうだが、「臨床、社会の先生たち、およびNGOの方々にどういったことを伝えるのか」という点を重視して選ばせてもらおうと思う」という。

日笠医師もできるだけセッションに出席しているが、全部は出られないため、抄録やプログラム委員からの情報な

どで、注目したい演題をある程度、絞り込んでいる。また、出席できなかった分は発表のスライドを借りて目を通すことでフォローしている。これもまた大変な作業だが、そうした丹念な作業を通し、診断、抗HIV療法、日和見感染症、合併症などに関して最もよく内容を表すものを選んでいかなければならない。

「臨床に関しては、ひとつにこだわるより、広めに紹介できるようにする方がいいのではないか」という考えもある。このため、たとえば新しい薬の反響などでは「こういう薬に関する演題が何題あって、いい評価がされていた」といったかたちで傾向を示すような方法も検討しているという。

樽井正義教授は、他のプログラム委員2人にも協力してもらい、3人で手分けをして社会関係の全セッションをカバーする方式を採用している。ラパトアセッションが定着している国際エイズ会議などでは、こうした複数のメンバーによるリサーチ方式が一般的だという。

樽井教授によると、社会系の8セッションの注目点を整理したうえで、最終的な報告は「予防」「治療・ケア」「サポート」に分類して報告されることになりそうだ。世界のエイズ対策の大きな目標であるユニバーサルアクセスも「予防、治療、ケア、サポートを必要とする人が、だれでもそうしたサービスや情報を利用できるようになること」を目指しており、それにあわせたかたちでもある。

最後の15分を目指し、3人のラパトアはいままさに大詰め作業に奮闘中。発表が楽しみだ。第24回日本エイズ学会学術集会・総会は、ラパトアセッションでひとまず閉幕となるが、会場では引き続き、一般公開プログラムのフィナーレが華々しく開かれる。



写真 座長の三浦聡之さんと打ち合わせをする塩田達雄教授
右は上から日笠聡医師、樽井正義教授

長期療養に 3分野から迫る

生活・セクシュアルヘルス支援・耐性ウイルス



HIV感染者のセクシュアルヘルス支援について語る有馬美奈さん

プレナリーセッションの2日目は、分野を超えて研究の最前線の情報を共有しようという趣旨が浸透し、会場は7割がたの椅子が埋まった。

社会分野の井上洋士さん（放送大学）は、長期療養を送るHIV陽性者の生活に根ざした調査・研究の必要性を7つの提言にまとめて訴えた。

東京都の各種相談窓口の担当者でも、HIV陽性者が障害者認定を受けられることを知る人は6割にとどまり、抗HIV薬の進歩で長期生存の現状に認識がある人は3割だったという。また、HIV・生活・調査をキーワードに論文をデータベースで検索しても8本しかヒットせず、「陽性者の生活が見えるような研究が不足」している一方で、いろいろなことがバラバラに調査されている面もある。「対象理解と支援のための基本情報（住居、就労、暮らしなど）を把握する体制づくり」の不足を指摘し、「より深い分析、多様な調査研究アプローチを通じて、新たな知見を得る必要性」を訴えた（以上、提言1、2、3）。

あわせて長く陽性者やその家族の聞き取り調査にあたってきた経験から、陽性者支援の重点の変化をとらえる必要性を指摘した（提言4）。

一方、調査結果を見てさらに落ち込むような調査は問題があるとして、ポジティブな側面にも着目し、元気が出るような研究の設計と、そのための「当事者参加型リサーチの実践」を訴えた（提言5、6）。最後に、生活実態調査を定期的継続的に実施する体制の必要性を訴えて締めくくった。

有馬美奈さん（東京都荏原病院）は「HIV感染者のセクシュアルヘルスケアと看護支援」と題しナースの立場から報告を行なった。

有馬さんはまず、性はQOL（生活の質）をかたちづくる重要な要素であることを指摘した。患者の性に向き合うことは、HIVにかかわらず、どんな病の看護でも必要である。しかし、医療従事者の羞恥心や戸惑いから臨床で十分な支援がされているとはいいいにくい。有馬さんはそうした現状を、看護師を対象にした調査をふまえて紹介した。感染者のセクシュアルヘルスを高め、維持することは、他者への感染防止や自らの重複感染などの予防のうえでも必要である。

つづいて、看護師が相談を受ける姿勢があるというメッセージを発する「許可」から、「基本的情報の提供」「個別

的アドバイスの提供」「集中的治療」へと進む、セクシュアルヘルス支援のPCISSITモデルを紹介。看護師の場合、患者さんにアドバイスしなければという気負いを捨て、最初の2段階ができればよいことを指摘した。

さらに「話の聞ける環境整備」や「性の多様性に慣れる」といった意識改革、「ツールをうまく利用」「必要に応じて専門職へ」など他領域の人との連携の必要性も示唆して話を終えた。

最後に、薬剤耐性ウイルスの疫学的傾向について、杉浦互さん（名古屋医療センター）が話した。ウイルスはもともと耐性の芽を含むが、薬剤の血中濃度が維持されていれば耐性発生も抑えられるという。杉浦さんはこのため、血中濃度をきちんと保つことの重要性を強調した。また、服薬回数や錠数の簡素化、選択肢の増加、耐性を獲得しにくい薬剤の開発などがすでに進められていることを紹介した。

つづいて、治療中の患者（治療集団）、および新規感染者（新規集団）に分けて薬剤耐性の問題を検討した。治療集団では、治療が困難になるほどの薬剤耐性が生じるケースは1.5%（杉浦ら、2007）で、諸外国に比べ非常に低い。日本のHIV治療の水準の高さを示すデータといえるが、それでもなお、調査対象の中でも97名の人が治療に苦しんでいる事実があることから、その救済を大きな課題としてあわせて指摘した。

新規集団では、耐性変異ウイルスの検出頻度がゆるやかに増加しており、現在は約9%前後だが、名古屋・東海地域は他地域に比べ、比率が高い。ただし、多剤耐性を獲得している症例はほとんど認められていない。また、いくつかの耐性変異ウイルスが流行株として定着していると考えられるという。

これまでの調査では、治療集団における耐性の頻度と新規集団における変異の間には相関があることが示唆されている。杉浦さんは「そうであるならば、薬剤耐性による治療失敗の頻度の減少に伴い、今後薬剤耐性の伝播も減少に転ずることが期待される」と述べる一方で、「どのような背景で薬剤耐性による感染が成立しているか、ウイルス学的、社会学的に明らかにする必要がある」とも指摘した。

世界のHIV陽性者 3330万人

学会会場でもUNAIDS推計の関連会見

世界のHIV/エイズの流行の最新推計と各国のエイズ対策の課題などをまとめた国連合同エイズ計画（UNAIDS）の報告書「世界のエイズ流行2010」が第24回日本エイズ学会開幕前日の11月23日、ジュネーブで発表された。学会会場でも24日夕、NGOによる関連記者会見が開催され、エイズ&ソサエティ研究会議の樽井正義副代表、日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラスの長谷川博史代表らがレポートの概要説明と評価などを報告するとともに、資料としてエイズNGOグループによるプレスリリースとエイズ予防財団が作成した報告書の抄訳（仮訳）が配布された。

エイズNGOグループのプレスリリース《UNAIDS報告 世界のエイズ流行 2010 について NGOによる要点の紹介》を以下に紹介する。

国連合同エイズ計画（UNAIDS）は、2年振りに各国から集めたカントリーレポート2008-2009をもとに、世界のエイズ流行の現状と課題をまとめ、＜グローバルレポート＞（360頁）と題する報告書を公表した。

流行を止め、押し戻すというミレニアム開発目標6は達成されつつある。「少なくとも56か国で、HIVの新規感染は横這いあるいは有意に減り始めている」。しかし取り組むべき課題は大きく、対策を拡大し継続することが求められている。「ARV治療が1人に提供される間に、新たに2人が感染している」。

＜エイズスコアカード＞（エイズ予防財団仮訳）と題された概要版にしたがって、報告書の要点を整理する。

【予防】

現状 新規感染は260万人、1999年より19%減少した。母子感染は13万人、2004年より25%減少した。

課題 さらなる普及が、とくに個別施策層の予防プログラ

ムの促進が求められる。母子感染予防を周産期ケアに含める。

【治療】

現状 ARV治療を受けている陽性者は520万人、2004年の13倍に拡大された。

WHOの新基準により治療が必要な1,500万人の36%にあたる。

課題 需要の増大に応える治療の普及が求められる。

簡素で低価格、耐性をつくらない療法を開発する（Treatment 2.0）。

【人権】

現状 人権への配慮の重要性は、ほとんどの国のHIV対策に明示されている。しかし、陽性者、影響を受ける人々、脆弱な人々を、犯罪者とし規制する法がある。

課題 効果的なHIV対策を妨げる法律や制度を改正する。HIV陽性者、影響を受ける人々、脆弱な人々の政策への参画を拡大する。

【ジェンダー】

現状 陽性者の女性の割合が増え、サハラ以南の15-24歳では男性の8倍になる。女性への暴力とHIVの広がりには関連があり、暴力への対策が求められる。

課題 女性と少女に対しHIVおよび性と生殖に関する保健サービスを提供する。

男性と少年に対し、有害な社会的文化的慣習や通念を変える啓発を提供する。

【資金】

現状 2009年に途上国のHIV対策に159億ドル支出されたが、まだ100億ドル不足。低・中所得国の対策費の52%は国内で調達されている。

課題 資金の調達、途上国・先進国・政府・民間、すべての共同責任である。先進国には、支援の強化と継続が求められる。

・世界のHIV/エイズ推計

世界のHIV陽性者数（09年末）	3330万人
年間新規HIV感染者数（09年）	260万人
年間エイズ関連死者数（09年）	180万人
流行開始以来のHIV感染者数	6000万人以上
HIV関連死者数	3000万人近く

アルトマーク賞に岡慎一氏

HIV/エイズ分野の優れた研究者に贈られる第7回日本エイズ学会アルトマーク賞、および若手研究者を対象にした第11回日本エイズ学会ECC山口メモリアルエイズ研究奨励賞の授賞式が25日午後、第24回日本エイズ学会総会に続き、会場のグランドプリンスホテル高輪プリンスルームで行なわれた。アルトマーク賞は、日本におけるHIV診療および臨床医療研究の発展に寄与した功績により、国立国際医療研究センターの岡慎一エイズ治療・研究開発センター長が受賞した。

岡博士は東京大学医学研究所時代の1986年に初めてエイズ患者の診察を経験し、以後米国のNIH留学を経て、本格的にエイズ診療を続けるとともに、臨床研究やモンゴル、ベトナムなどとの国際医療協分分野でも大きな成果をあげている。授賞式では、こうした経験を踏まえ、「HIV感染症とのかかわり 24年を振り返って」をテーマに記念講演を行なった。

ECC山口メモリアルエイズ研究奨励賞は以下の3氏が受賞した。

熊本大学医学部 天野将之：多剤耐性株に高い抗ウイルス活性を発揮する新規抗HIVプロテアーゼ阻害剤の同定・開発とGag capsid 蛋白挿入変異とCA自壊の分子機構の研究

国立病院機構名古屋医療センター 伊部史朗：世界最初のHIV-2組換え流行株CRF01_ABの発見

国立感染症研究所 大出裕高：in silico構造解析のHIV/エイズ研究への応用



シリーズ く さ の ね GrassRoots 東西南北！ ~NGOブースからの紹介3

【横浜Cruiseネットワーク】

横浜の立ち寄りスペース（ドロップインセンター）である「SHIP」を運営するのが、横浜Cruiseネットワーク。SHIPは神奈川県



との共同事業として2007年9月にオープン。性的マイノリティ向け施設を自治体と共

同運営するスタイルは、全国初だそう。

SHIPの活動や意義は3つ。一つ目は横浜のMSM向け施設へのアウトリーチの拠点だ。2つ目はMSMについて学校教員や生徒自身への普及啓発センター。そして3つ目は、実際に若者たちが立ち寄り、おなじ仲間と安全な環境で出会うことができるドロップインセンターとしての役割。イベントや放課後に立ち寄り、スタッフやピアの仲間と話すことで多くの情報を受け止めることができる。SHIPでは月2回、休館日にHIVの迅速検査も提供している。

現在、新規の来館者数は横ばいだが、リピーターの来館が定着。そしてそのなかに高校生など10代が多く、彼らの語りのなかにはセクシュアルマイノリティの若者が抱えるシビアな問題が凝縮している。それらはワークショップ6「MSM」でも報告された。

【HaaTえひめ】

四国・松山からの参加。2006年9月、地元でネットのゲイ向け出会い系掲示板を運営していた新山賢さんが、やはり地元のゲイバーが主催するクラブイベントでコンドームキャンペーンを開始したのが活動の始まり。コミュニティ・キーパーソンとしての活動がカギとなる典型例だ。

地方都市は性的マイノリティへの偏見や閉鎖性など困難がある一方、動きだせば、連携するべき相手と手近に手早く、しっかり結びつくことができる。新山さんたちも県・市の行政やさまざまなセクター、地元のキーパーソンと連携を深め、翌年には県からゲイ向けフリーペーパーの制作委託を受けた。今年5月には、トヨタ財団の地域社会プログラム助成を受け、効果的で持続可能な予防啓発モデル、ネットワーク構築の活動に踏み出した。

県HIV啓発にかかわる資料制作や、陽性者の手記リーディングイベントなどの企画運営を行なうとともに、HIV問題の根底にあるといわれる性的マイノリティの自尊感情の回復、ユース支援の問題にも取り組みはじめた。中高生のゲイ・バイ男子のためのイベント「+TALK10」や、県内の養護教諭向け情報発信などがそれだ。



【MASH大阪】

大阪地区のゲイ・バイセクシャル男性の性的健康の増進を目指すMASH大阪は1998年に発足し、2002年には大阪市北区堂山町でコミュニティスペースdistaがオープンした。MASHは《Men And Sexual Health》の略。distaの運営のほか、ゲイバーなど商業施設向け月刊コミュニティ紙の発行やウェブサイトによる啓発情報の提供、勉強会などの活動を続けている。

ブースではMASH大阪のメンバー後藤大輔さん（写真左）とdistaスタッフの有田匡さんが待機して活動状況などを説明。8月に刊行された中高年向け啓発冊子『男とセ

ックスする男のためのAIDS & LIFEガイドブックミドルエイジ編』も配布している。情報にアクセスする機会が少ない中高年MSMを対象に、関西の第一線で活躍する専門家が必要な情報をまとめたガイドブックだ。「中高年が持っている知識より現実はいいい方にも悪い方にも、ちょっと進んでいます」と後藤さんと有田さんは話している。



【WAVEさっぽろ】

すすきののゲイバーなどを舞台に、MSM向け予防啓発を行なう団体。デザイナー竹内仁さんが、札幌市からMSM向けHIV啓発冊子の制作の仕事を受けたことをきっかけに、たんに冊子を制作して配布して終わりではなく、関連イベントの同時開催での波及効果をめざし、イベント運営を軸に立ち上がったのがWAVEさっぽろだ。WAVEはそのイベントの名称。第1回は2005年。



当初からゲイバーの「ママ」が主力になっていることが特徴。現在も6店のママと竹内さんが、年に一度ベースのイベントを運

営している。今年も3月にリーディングや保健所職員によるわかりやすい講演などのイベントと、そのさいのパンフレット発行を行なった。とくに今年は、手記（陽性者自身やその周辺の人びと）も写真も、地元札幌の人びとの手によるものだ。

編集を終えて

●学会の発表会場はパワーポイントの画像を用いた報告が多いので、必然的に場内が暗くなります。2日目、3日目となると私のような怠惰な参加者はどうもいけません。必然的にまぶたが重くなり、ついウトウト……。一般演題にくまなく目配りするラパトアの皆さんの難行がしのばれます。苦労の結晶ともいえるべき報告が楽しみです。（編集長・宮田一雄）

●学会会場での毎日発行体制は今日まで。みなさま、お楽しみいただけましたでしょうか。つづいて12月に3日目の報告と全体のまとめを載せた7号が発行されて、制作班の任務は終了です。その7号や、これまで発行されたバックナンバーは、学会のウェブサイトにpdfがアップされていますので、ぜひご利用ください。なお、本部（第1会場隣）にバックナンバーがあればお分けます。（永易至文）

第24回日本エイズ学会学術総会・総会 ニューズレター 第6号

編集長：宮田一雄
スタッフ：永易至文、吉田智子
写真：菊池修

25日までの登録参加者総数：1122名
（18時現在）